

核兵器のない平和を求めて — 原爆の恐ろしさを知れ —

農業科3 光本 充晴

広島に原爆が投下されて五十年。当時17才で西農三年生だった私は、八月六日午後三時頃先生からの伝達で賀北部隊に召集された事を知り、農場実習をやめてその足で部隊のあった西農北寮に入隊し、工月中隊（西条町 工月 清中尉）第一小隊（隊長 寺西村 柏尾 誠 伍長）に配属され、翌早朝五時に列車で西条駅を出発して広島の救援に向かった。

その時に接した被爆の惨状は、この五十年間脳裏を離れる事もなく今でも鮮明に思い出される。

見渡す限りの焼野原、ズルッと剥げて垂れ下がった皮膚、水を求め乍らやがて死んでいった全身火傷の負傷者、川面に浮かんだ無数の死体、迫り来る火を逃れたのであらう火傷の身を水槽に入って死んだ数知れない死者、川土手に日覆をした仮設病院に続々担ぎ込まれる重傷者その端から次々に息絶える人、死体を集めて次ぎから次ぎと纏めて焼いた幼年学校の校庭、炎天酷暑のもとあの時の広島はさながら地獄の様相であった。それでいて、ざわめきの中にも何とも云えない不気味な静寂。

広島は一発の爆弾で一瞬にして全ての生命を奪い廃墟の街と化し、七十年間は草木も生えず人も住めないと云われた。

当時、私もやがて間もなく兵隊となりお国の為に戦場に向かい闘って死ぬと思っていた。軍都とは云え多くの非戦闘員を巻添えにしたB29の特殊爆弾（当時そう言わされた）攻撃には云いえない腹立たしさを覚え。アメリカのやり方を憎んだことが思い出される。

連日、負傷者の収容、死体の処理をして八月十三日に帰西して除隊となり翌春卒業し、やがて就職し今ではその職も退き今日に至っているが、当時、原爆の放射能を浴びた者は、ムラサキの斑点が出る、毛が脱ける、体がだるい、こんな事になつたらもうおしまいで、やがて死が来ると云われており、酒を飲む人は原爆症は出ないなどの笑い話しあつた。私も原爆症は出ないだらうかと常にその翳におびえ頭の片端に心配があつた。二年ぐらいして、一ヵ月余りに及ぶ黄疸で勤めを休んだが、のこと以外は幸いにして大事もなく老境を迎えるに及んでいる。

太平洋戦争が終結して世界は東西の冷戦構造となり核の抑止力、核の傘に守られた国の安全、核保有の力の均衡にたつ核兵器開発競争の激化により核を持つ国は増加し、冷戦構造が崩壊した今日でも、核実験、核武装、核拡散などの脅威は依然として続いている。なかでも制御のない核のヤミ売買はその危険度

を増幅しているようだ。

ここで私の述べたいことは、誰しも同じであらうと思いますが、核保有国はホントに（核の威力でない）核の恐ろしさを知っているのかと疑問に思っている。

彼らの考えは、核攻撃をいち早く探知して先に攻撃するから自分達は絶対に安全であるとウヌボレているのではないのでしょうか。

また、原爆投下は正当であったと云う評価が今もって云われているが、そうした人達の場合は莫大な開発費により完成した原爆は使用しなければならなかったと云う環境にあったのだろうと思われる。かたや、戦争の進展により兵隊どうし相い対の闘い以外に東京・大阪など人と街を狙った無差別攻撃の繰り返しにより人間的、人道的に人間性のマとした感覚が原爆投下の命令を下したのだらうと考えられてなりません。

日本軍の敗退により沖縄が戦場となりやがて本土決戦、連合軍の本土上陸により百万人の死傷者が予想され、原爆投下はこうした事態を回避し日本の降伏を早めるために必要な手段であったと云われておるようですが、その為には広島の人人はどのように死んでも良かったのか、他に方途はなかったのか、原爆の正当性のためには容認されなければならなかったのか。私は大きな疑問と強い憤りを覚えるものであります。

平成六年六月七日(火)の新聞報道に依れば核兵器使用に対する国際司法裁判所の求めに、日本政府は条件付ながら「国際法違反とは云えない」とした意見陳述書を出された様であります、地球上で唯一の被爆国日本がナゼはっきりと真正面から違法性を主張しないのか、日本政府の在り方姿勢に疑問を感じなりません。

このような時にあってこそ、平和の原点としてそして核の脅威を取り去るためにも被爆の実体を風化させてはならないと思います。

自分だけの正当性、相手の痛みを考えない、自分の力を誇示して他を押さえ付ける、うらみ、憎しみ、こうしたことの繰返しでは平和はこないと思います。

五十年たった今こそ核兵器の恐ろしさを知り、自分の正当性だけを主張しないで、相手の痛みを考えそして憎しみを越えてこそ平和の灯りを見る事ができるのではないかでしょうか。

五十年間脳裏に焼きついた惨状

農業科2年 前重 義明

昭和二十年八月六日広島県立西条農学校の朝礼で全員東方に向いて整列をしていたところ、後方（広島方面）に「ピカッ」と閃光を感じた。

これが後日明らかにされた、広島市に投下されたあの原子爆弾の作製とは誰しも知り得なかった。

その日は連日の例により勤労奉仕のため国鉄西条駅に行き、貨車に米俵（玄米・四斗入り・十六貫目）を担いで積み下ろし作業であった。

昼前頃からは広島方面よりの列車で、見るもいたましい火傷や負傷した多数の人が輸送されて来た。私達は急いでこの方がたを保健所や国立広島療養所に担架で移送するものとの分担作業となつた。

私達学生間では、広島のガスタンクの爆発だとか特殊な爆弾が広島市に投下されたのだとか、げな、げな話しに花が咲いた。

下校時、×君が「召集令状が来た」と言ったが私は×君に対して返す言葉もなく、ただ一言「元気で」と言い二人は無言のまま別れた。

オンボロ自転車での帰途「ああ、大変な事になった、日本はどうなるのだろう」今日一日の出来事と重ね合わせて、あれこれと考え想像しつつ帰宅した。

どうしたことか何時もは多忙な父が今日に限って家の前で私を迎える「おお元気で帰ったか、暑かったろう」と声を掛けてくれた

山盛りつがれた白いご飯の食卓に、終始無言の母を始め叔父、弟妹の八人がつくと父が、おもむろに差し出したものは私に対する召集令状であった。そして「お前は可愛そうに、今までの出征兵士の様な見送りができるが、体を大事にして頑張れ…… 今日は何も出来ぬが腹一ぱい飯を食べて早く休め」と言ってくれた。

八月七日朝賀北部隊に入隊（西条農学校に集結、広島の救援・整理などの作業を主目的として新に編成された陸軍部隊）同日隊は、広島に移動する。

入市の瞬間「これはどうしたことだ。驚嘆して声も出ない、城がない、まともなビルが無い、家も無い。緑の木も無い、目に入るものは一面瓦礫の焼野原、その中にポツン、ポツンと焼け崩れかかったビル、骨組みだけの電車、自転車、眼前には被爆死体や負傷者… 筆舌に表す事の出来ぬ惨状である。

授業料を納めている一学生の私だが、学生服に一つ星を付けていると陸軍二等兵である。軍律厳しいなか、広島城跡附近で負傷者の救護、被爆死体の処

置、焼け跡の整理など、など、連日酷暑の中での作業に疲労困憊。六十年間は市内に住むことも出来ぬ等の噂。

十五日正午の戦争終結のラジオ放送、あまりにも大きなショック、体験で放心状態で感動する気力も薄らいで来た。それから一両日過ぎてからは、牛田不動院附近の山林内で軍馬など約二十頭の治療に従事する。ほとんどの馬が右側か左側の半身が焼け爛れている、三尺四方位の爛れた皮膚を剥がして木炭の粉末のような薬を付けて手当てをする。蹴る馬、かみ付く馬、さすが馬好きの私でもたじたじの連続であった。この時、上官が「馬には新鮮な草を十分に与えよ、お前達は帰ったらトマト、南瓜を多く食べ、できればアルコールも」と告げた事を今も忘れない。。

あれから五十年、あの惨状とあの時の体験は常に私の脳裏に焼き着いている。これからもふれることはあるまい。